



# 福音書のイエスを通して見出されるセラピストの人間学的基盤ーセラピストの受難，責任，そして運命ー

竹井，夏生

---

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2021-03-25

(Date of Publication)

2023-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7968号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007968>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



## 論文内容の要約

氏名 竹井 夏生  
専攻 心身発達専攻  
指導教員氏名 吉田 圭吾

### 論文題目

福音書のイエスを通して見出されるセラピストの人間学的基盤  
—セラピストの受難，責任，そして運命—

### 論文要約

本稿は、心理臨床に携わるセラピストの存在論的・営為的基盤を、新約聖書とりわけ福音書におけるイエスを通して考究する試みである。現代においてセラピストは、医療、福祉、教育などさまざまな分野において、心理的対人援助に従事している。ただその営みは、現代の医療的また治療的パラダイムには決して収斂させることのできないありようを有している。そのありようを伝えるひとつの概念として、「傷ついた治療者 (wounded healer)」が挙げられる。それは、クライアントとの臨床関係において、セラピストは激しく傷を蒙りながら、自らをそこに開き、その傷つきを要請しつつ生き抜いていくありようといえる。このセラピストの受傷を通してはじめて、臨床関係は展開しうるのであり、またクライアントに治癒の可能性が拓かれる。そしてこのようなセラピストのありようは、まさに福音書に描かれたイエスのありように通じるものである。イエスは当時のパレスチナを巡り、心身また社会的霊的危機を抱えた人々と深く関係し、そしてその道行の中で深く受傷し続けるとともに、それは呪われた姿として、十字架の受難という最大の傷つきに行きつくのである。

ただ十字架に至る受難の道のりは、その先に「福音」が引き続く。キリスト教が伝えるその真髄のひとつには、この受難と福音との隠された道のりが挙げられる。そこでは受難は福音に必然的に連なるのであり、受難こそ福音という、容易には結びつけ難いパラドックスに軌道が与えられている。そこではイエスの十字架上の刑死は福音に連なるものであり、それ自体が福音なのである。そしてこのようなパラドックス、隠された軌道を描く存在としてのイエスに、現代を生きるセラピストにとっての存在論的・営為的基盤を見出すとともに、「傷つきと呪われとしてのセラピスト」として、セラピストが蒙るさまざまな艱難を生き抜く道のりと、その営みを通したクライアントの回復に寄与しうる手掛かりを見出すことができるのではないか—その考究が、本稿に通底するテーマである。

以下に本稿の展開を簡潔に示していく。序章（第1章）においては、この「傷つきと呪われとしてのセラピスト」の姿を浮かび上がらせつつ、それをイエスのありように連ならせていく。ここでレヴィナス (Levinas, E.) が取り上げられるが、それは『存在の彼方へ』においてレヴィナスが描く「主体（「私」）」というのが、傷つきを蒙り、そこに曝され、そうあることこそが「責任 (responsabilité)」であり、主体の「意味 (signification)」であるとい

(氏名 竹井 夏生, No.2 )

うありようを描いているように、「傷つきと呪われとしてのセラピスト」の姿への大きな示唆となっていると考えたためである。さらにそのようなありようとしてのセラピストを、先行研究として心理臨床と実践神学の双方から取り上げながら、その輪郭を浮かび上がらせていく。

第2章において、本稿における方法論としての「解釈学」が議論される。ここで解釈学は、「私」を「ことば」に繋ぎ止めていく営み、とりわけ「ことば」を失い、「私」を失った傷ついた心に「ことば」をあてがい、「私」を再び取り戻していく営みとして理解される。それはセラピーの営みにも通じるものであり、また「受難こそ福音」の隠された軌道を浮かび上がらせていくための手がかりでもある。ただそれはガダマー (Gadamer, H.-G.) が伝えているように、道具として用いる意味での「方法」ではなく、「私」を取り戻していくという営みと切り離すことのできない、あるいはそのような営みそのものとしての「方法」であることが議論される。本章では主にリクール (Ricoeur, P.) のミメシスの概念とその解釈学を追いながら、その営みが考究されていく。

第3章は、「信じること」についての探求である。エリクソン (Erikson, E. H.) の「基本的信頼感」やブランケンブルク (Blankenburg, W.) の「(生きる世界に) 親しんでいること」といった概念は、人が生きる上でその生を最も基底において支えるものであるといえる。一方、キリスト教神学においても「ピステイス πίστις」という新約聖書に散見され、従来「信仰」と翻訳されてきた語は、人間、また神を含めた「信」の关系的場を構成し、そこにあって人が生きる基盤を確かにしうるという一つの言語的宇宙を構成している。これら心理臨床と神学双方からの考究をここでは「信じること」という言葉によって繋ぎ止めつつ、その姿を探求していく。そしてこの「信じること」は、イエスが最も強調したもので、またイエスのありようを最も象徴するものであるとともに、それがセラピストのありようを考える上での、またセラピストクライアント関係を考える上での大きな示唆になることを示していく。

第4章では、福音書の世界の具体的な状況に踏み込んでいく。ここではセラピストとしてのイエスが、この福音書の世界をどう見ていたのか、そして受難に至るまでこの世界をどう生き抜いたのかということ、ユング (Jung, C. G.) によりもたらされた心理臨床の重要概念である「コンステレーション (constellation)」を軸に探求していく。福音書の世界は「信じること」が容易には成り立たない世界、理不尽や暴力、差別や病いがあまねく世界である。そしてこのような世界のありようを、歴史を通して人々の内に、またその世界の中に堆積された、済んでいないものうごめきという観点から捉えていく。そこに村上春樹の「歴史」、カールスの「トラウマ」の概念が援用されながら、「コンステレーション」というものの見方に深みを与えていく試みが進められる。そしてこの概念を軸にして、そのような状況をイエスがいかに洞察し生き抜いたのかということ、セラピストの営みと重ねながら考究していく。

第5章では、イエスとユダとの関係を一つの臨床関係として捉え考察していく。福音書によれば、ユダはイエスの十二弟子の一人として数年を共にしつつも、最後にイエスを裏切り、為政者側に引き渡し、イエスの十字架刑の引き金となった存在として描かれている。そこに第3章において考察した「信じること」の希求と蹉跌との極めて激しい揺れ動きを見出しつつ、この臨床的關係をイエスがどう洞察し生き抜いたのかを、「逆転移」や「コンステレーション」の概念にも絡めながら考察していく。それは「傷つきと呪われとしてのセラピスト」のありようを最も鮮明に描きうる場面であり、現代の、とりわけ激しい情緒の行き交うセラピー場面へ

の示唆ともなりうることが示される。

第6章は、「出会えなさ」についての考察である。臨床関係という「出会い」を生きるセラピストにとって、「出会えなさ」という事態は、最も深く傷つきを与えるものと言えないだろうか。本章ではイエスもまた、福音書の華々しい出会いの記述とは裏腹に、この「出会えなさ」を味わい続けた存在として、そのありようをイエスの語った譬え話を中心に見出していく。ここで「出会い」は現実現生の「出会い」に収斂するのではなく、今ここを超えた領域にまで広がるものとして、その「出会い」の地平を浮かび上がらせていく。そしてここに再びレヴィナスの『存在の彼方へ』が取り上げられ、レヴィナスにおける「私（主体）」と「他者」との「出会い」のありようが参照されていきながら、セラピーにおける「出会い」や「出会えなさ」が考究されていく。

終章（第7章）では、我々は福音書の世界から再び現代の地平へと戻ってくる。ただそこは20世紀が「戦争の世紀」と形容されるように、「暴力」がかつてないほどに行き交う場所である。ここでいう「暴力」とは、福音書の世界においてイエスを取り巻いていたものであり、それは現代においても存続しているだけでなく、きわめて洗練されながら、我々の目から隠れ、その姿を見つけることが容易ではないままに、我々はそれに曝されている。またこの「暴力」は他ならぬ臨床場面において、クライアントの周囲に、また臨床関係自体に際立つものでもある。この「暴力」を、現代においてその最たる陰惨さの高まりを見せたアウシュヴィッツに見出しつつ、レーヴィ（Levi, P.）、アーレント（Arendt, H.）、アガンベン（Agamben, G.）といったアウシュヴィッツの「生き残り」、哲学者を手掛かりにしてその輪郭を浮かび上がらせる試みを行う。そこで見出される「暴力」の姿態は、「<sup>nichts/nothingness</sup>無」に象徴されるものとして、また「私」の無さ、「信（信じること）」の無さ、「ことば」の無さとして、さらにまた人間が人間であるその人間性をそもそも無きものにしようとする力として突き止められながら、この「暴力」に対峙するセラピストのありようが考究されていく。

以上のような論考を経て、現代を生きるセラピストとして、その職能がいかなるものであるのか、そこで蒙る艱難をいかに生き抜いていきうるのか、セラピストとして生きるとはいかなるありようなのか—そこに「受難」、「責任」、そしてセラピストとして生きる上での「運命」の引き受けといった要素を浮かび上がらせていく。そしてそのような存在論的・営為的基盤を持った存在として、現代のこころの危機を生きるクライアントに資するセラピストのありようが示されていく。（3698字）